

メープルレター（１０２）

新年、ばあちゃんの卵焼き

心新た 2026 年がスタートして早くも 2 週間。雪空が町を覆う日々が続いています。何とも厳しい冬をすごすことになりました。和水仙が匂い、梅便りも遠くない日本にノスタルジーを感じる今日この頃です。

お正月がなく大晦日から新年に変わる瞬間に「明けましておめでとう」と挨拶をして新年がスタートするのは例年通りでした。

クリスマスは、娘たちと例年の如く、フォアグラとシャンペン、娘の好きなエスカルゴ、ムール貝のクリーム風味、寿司、そしてすき焼きで締めてクリスマスイブが終り、クリスマス（12月25日）はお寿司を1桶とクリスマスプレゼントをもって久しぶりに義理の長男宅に出向き、クリスマスのお祝いをする事になりました。金持ち志向の長男宅では5人の子供達（20歳を先頭に、男の子が3人、女の子が2人）が集まり何とダイナミックなことか。。。男の子3人は180センチ以上の背丈の大きな子たちです。義理の長男の14歳の息子は、既に軽く190センチを越え、てっぺんにくるくるカールの髪の毛の頭が鳥の巣のように乗っかり何ともかわいいのです。金持ちの割には質素な食事とテーブルセッティングなのですが、にぎやかな子供達との瞬間はそれをカバーしてくれます。14歳の義理孫は、椅子を引き寄せ、隣に座ると、

「これっていつもの僕の卵焼きだよね。。」

「そうよ、貴方のために焼いてきた甘い卵焼きよ。」

ニコツとすると、クルクル巻きの頭を下げて卵焼きを引き寄せて幸せそうにほおばっていました。この子にとっては、和風卵焼きが好きというより、自分の事だけを思ってく

れる人がやって来たのが嬉しいのでしょう。小さい時から、父親に良く叱られ、泣いていたのですが、

「はい、ばあちゃんの卵焼き」

と、卵焼きをもっていくと泣き止んで嬉しそうに食べていました。

「ねえ、来年（新年）は僕の将来はどうなってしまうのかなあ？」

親が離婚して以来、両親の家を交代で行ったり来たりして暮らしていたのですが、私立の中学校に入って以来、学校が遠すぎて父親には送り迎えが出来なくなってしまう、週末時々やって来るようになりました。その上、母親が新しいパートナーと暮らすことになり、学年末には遠い田舎に引っ越すことになりました。今の学校は続けられないかもしれないと悩みを語っていました。アルバイトもできなくなるだろうし。。この子の悩みは尽きません。母親の幸せを思うと、やはり田舎に移ることになるだろうし、教育費、生活費、衣服費、雑費など経費の90%を出している父親の忙しさを思うと無理はいえないし。。

「あー僕はどうしたらいいんだろう。」

「むずかしいねえ。。でも、お父さんもお母さんも貴方を放り出すことはないし、貴方を守っていくと思うから、様子をみよう。まずは卵焼きを食べたら？」

「そうだね、まず食べよう。そうそう、今度この卵焼きのつくり方教えて？」

そうだ、今度、この子の誕生日には卵焼き器をプレゼントしよう。

楽しいおしゃべりの時が過ぎていきました。玄関のチャイムがなると、

「お母さんが迎えにきたよ。あっちのお爺さんやおばあさんの所でクリスマスのお祝いをする時間だよ。」

義理の長男に促されて、二人の子供達は帰り支度を始めました。玄関先で次女が帰ってしまうお姉さんにおら下がって、帰らないでと泣きついています。楽しく遊んでいたのに、いかないで。。振り切って帰る長女。まるで歌舞伎の世界のようです。その先に見

えたのは、長男の元嫁。あーもう8年も会っていなかった。思わずお互いに駆け寄ってしっかりとハグをしました。痩せて綺麗になった元嫁。元嫁は涙ぐんでいました。そう、皆、それぞれ会いたいと思っていたのです。

「今は幸せなの？」

「うん、幸せ。」

生きるとは難しいものです。長男の息子、二人の娘、それぞれはこうした波にもまれながら強く生きていくような気がします。

その後、旧年のどんずまりの大晦日にはカリブ海のバカンスから帰って来た次男一家とチャイナタウンで飲茶のランチでした。家族4人はやや日焼けし、カリブの島めぐりをするキャプテンとシェフ付きのカタマランの船旅を楽しんできたようです。泳いだり、シュノーケルで熱帯魚や大亀をみたり、島の小山を散歩したりと目いっぱい楽しんできたようです。飲茶のテーブルの片隅でひっそり座っている16歳の金髪の美形の義孫息子は何ともファッショナブル。往年の日本のファッションブームの装いのようなパンタロンとジャケット。このままファッション雑誌のトップモデルになりそうです。

「ど、ど、どうしたの？」

「僕の好みにあわせて、日本に注文したんだ。。。」

「貴方のお爺さんもそんなファッションを昔着こなしていたわよ。。」

ぐるっと回ってファッションショーをしてもらい、ファッション談義となりました。大学教授でイケメンとはいえダサイ父親、美女なのにやはりダサイ母親には理解してもらえない自分のアイデンティティと美観の主張が爆発したようでした。

こうして年末年始が過ぎて1週間ほどたった時、義理の長男から、

「今家にいる？ケベックの美味しいチーズを10種類ほど買ったから、一緒に食べよう。パンとワインももっていくから。」

義理の長男は次女とやってきました。この頃頻繁にやって来る長男にはある意味ではここは息抜きの場所なようです。それにしても、ケベックのチーズがこれほど美味しかったとは。

「フランス人がここで作っているんじゃない？」

「違うんだよ。根っからのケベックの人たちが作っているんだ。おいしい牛乳がとれるから、おいしいチーズが作れるらしいよ。」

「それにしても、このワイン美味しいわね。」

「ブルゴーニュだよ。おいしいブルゴーニュワインって少ないから、棚にあったブルゴーニュを全部買ったんだ。たぶん1本一万円くらいすると思うよ。」

こうした贅沢な時を過ごしている一方で、トロントで剣道のセミナーに参加していた次男はケベックの病院からの緊急呼び出しにあい、ケベックへと飛行機に飛び乗ったのでした。次男の嫁が凍った雪道で転倒して足首を骨折して救急車で運ばれたました。足首三か所の複雑骨折と脱臼をおこしていました。氷で滑って転倒する事故があまりにも多いため、手術の見通しがなかなかつかなかったようです。脱臼はまず手当が行われ、翌日の夕方（日曜日）にやっと手術、そして帰宅となりました。手術は成功し、回復を待つ段階に入ったようです。次男は、嫁の世話、子供達の世話、仕事と多忙なようです。

そうした中、義理の長男から電話が入りました。

「和子、今、空港。クエート経由でタイまでバカンスに行ってくるから。」

義理の長男の、お嫁さんへの誕生日プレゼントのタイ2週間の旅です。

「クエートって変わって所をとおっていくのねえ。」

「イラク戦争用のアメリカの軍事基地ができて以来、クエートはすっかりお金持ちになり、空港も豪華らしいよ。もっとも、イラクは戦争に負けてもアメリカには石油はやら

ないと膨大な油田に火をつけて燃やしてしまったけれどね。これからタイまで26時間の空の旅なんだ。」

「ボンボヤージュ（良い旅を過してね。）

26時間か遠いなあ。。マダム田中は、痛みが引いて歩きやすくなってきた脚で、近所のカフェ通いを楽しんでいます。